凍河

（とうが）

五木寛之

文藝春秋

凍河（とうが）

五木寛之

文藝春秋

五木寛之（いつき・ひろゆき）

1932（昭和7）年9月福岡県に生まれる。生後まもなく朝鮮にわたり47年引揚げ。52年早稲田大学露文科に入学57年まで在籍。業界紙編集者、レコード作詞家、ルポライターなど多くの職業をへて66年「さらばモスクワ愚連隊」で第6回小説現代新人賞、67年「蒼ざめた馬を見よ」で第56回直木賞を受賞。「青年は荒野をめざす」「デラシネの旅」「青春の門」「風に吹かれて」ほか多数の作品がある。

凍河

昭和五十一年二月十五日　第一刷
昭和五十一年八月二十五日　第七刷

著者　五木寛之

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社文藝春秋
〒一〇二東京都千代田区紀尾井町三
電話東京（〇三）二六五一一二一一

印刷所　凸版印刷
製本所　和田製本

＊万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Hiroyuki Itsuki 1976　Printed in Japan

長篇小説／凍河／目次

凍河（とうが）／目次

兄貴の忠告　7
ナツキの手紙 I　18
医局長の提案　26
革命的美女　39
変った家族　50
しらけた季節　63
葉子とぼく　70
じれっ亭の夜　82
兄貴への手紙 I　94
夢みる権利　98

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

禁じられた遊び　131
院長の秘密　154
ナツキの手紙 Ⅱ　169
夜と霧の奥で　182
兄貴への手紙 Ⅱ　192
予感と決心　240
理由ある反抗　258
夏の旅　286
あてのない出発　305
終りの章　316
「あとがき」にかえて　324

カバー・本文挿画／風間完

装幀／竹内　和重
題字／原アート
アクチュアル

凍

河

兄貴の忠告

兄貴から電話があったのは、日曜の夜だった。たぶん、十時半かそこらだったろう。

ぼくはそのとき、じつは、某国大使館と目と鼻のさきの、麻布にある友人の部屋にいた。某国大使館のそばにいたといっても、べつにぼくらのやっていたことが、国際間の緊張に関係があるというわけでは、ぜんぜん、ない。

医大のころの仲間がめずらしく集まり、彼ら地方出身の医師の卵たちが気のきいたつもりで〈ブロック建築〉などと称している、例の中国のゲームにたずさわっていたわけだ。言うまでもなく麻雀、あの忍耐と不毛のギャンブルである。

正直なところ、ぼくはカモだった。いや、カモ以下の存在という意味で、口の悪い仲間のあいだでは、アヒルなどと呼ばれているらしい。ぼくはこのゲームに参加するたびにいつも、以前なにかで読んだあの魯迅の言葉、〈絶望の虚妄なること、希望に相同じい〉をかならず思い出すのである。

その晩、電話が鳴ったのもまた、そんないつわりの希望がぼくの胸を高鳴らせつつあるときだった。なんとぼくの目の前にならんだ十三箇のブロックは、幸運にめぐまれれば緑一色の驚異的なあがりすら可能であることを暗示していたのだ。

「おい、ここに竜野ツトムくんとかいう、聞きなれん名前の男がいるかね」

受話器をとった対面（トイメン）の敵が、皮肉たっぷりにぼくの顔を見て言った。

「竜野努くんですと？　ひょっとすると小生かも」

ぼくはわれながら軽薄な口調で応じた。案のじょう、相手は毒をふくんだ笑声をあげて、

「小生カモ、だって？　あまりおごった物の言い方しちゃカモに対して失礼じゃないのかね。お前さんはアヒルのトムさん。カモへの道はまだ遠い」

「いや、わるかった。申し訳ない。訂正する」

「妙に素直だな。おい、こいつ怪しいぞ。なにかでかい手かかえ込んでるんじゃないのか」

敵もさるもので、疑ぐり深げな上目づかいにこちらの顔色をうかがいはじめた。ぼくは皆に一時休戦を宣言して、受話器に手をのばした。

「はい。竜野本人にかわりましたが」

「おう、ツトムか」
なんだ、兄貴の声じゃないか。それにしても、どうしてここにいることがわかったんだろう。
なんとなく、いやな予感がした。それにどうやら電話の声は、北海道からかけている感じじゃない。
「お前、いまそこで何をやってるんだ」
「うん、まあ、ちょっとね」
「ちょっとね、じゃない。音でわかるぞ。いつまでそんな——」
「東京へ出てきたのかい？」
説教がはじまる前に、ぼくのほうからきき返した。うん、と、兄貴は言った。
「ちょっと話があるんだ。明日は早い飛行機で帰るから、急だが、いまからでも会えんか」
どうやら例の件にちがいなかった。ぼくは覚悟をきめた。
兄貴は、すぐ近くのホテルに泊っているらしかった。ぼくは十一時半に、そこのバーで会う約束をして電話を切った。
「すまん。待たせた」
ぼくは皆に謝って、目の前の牌をおこした。ぼくの希望は、ますます現実のものとなりそうだった。あと一回、幸運な引きに恵まれれば、魯迅先生もびっくりするような芸術的な手のおぜん立てがととのうことになる。ぼくは右手でこめかみをおさえた。内心の興奮のために、そこの血脈がふくらんで青筋立ってやしないかと、気になったからだ。その瞬間、
「では、軽い手で逃げておくか」
対面の敵が、バタバタと手牌を前に倒してにくにくしく笑った。
「童野先生には悪いが」
「べつに」
ぼくは絶望と怒りで死にそうになった。でも、それをさとられまいと、素早く牌をかきまわして口笛を吹いた。唇が乾ききっていたので、妙な音がした。
「悪いけど、この回で抜けさせてもらう」
ぼくが言うと、みんなが笑った。こういうのが一番腹が立つところだ。
その回を終ると、負けが予想外にこんでいることがわかった。足りないぶんを借りにして、その部屋を出た。
ぼくはアパートの外においてある単車を、しばらく押して坂の下まで行った。静かな住宅街には、この歴史的中古オートバイの爆音はふさわしくないと思ったのだ。なにしろ車齢十数年になんなんとする老兵だから、キック一発でかかることもあれば、えらく機嫌の悪いときもある。
ホテルに着いたときには、約束の時間を三十分ほど過ぎていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

バーは意外にすいていた。

はいって左手の、カウンターの端に兄貴がいた。彼はグレイのメッシュの上衣の下に、黄色いポロシャツを着て、ワニ皮のベルトをしめている。髪は七三に分け、冷房のきいたホテルだというのに、扇子を左手に持った格好は、まったくさまになっていた。いかにも地方から上京した中小企業の経営者という感じだ。

もっとも、これが兄貴の意識的な演出だということぐらいは、ぼくもとっくに気づいている。演出というより、むしろ、ある断念のすがたというか、一種の居なおった形にちがいない。

ぼくと五歳ちがいのこの兄貴は、実際には、高校時代に、すでに大学のセクトを牛耳るほどの政治的早熟さをしめしたし、大学を途中でとびだすと、アメリカにわたって、ジャック・ケルアックや、無名時代のアンディ・ウォーホルなんかとつきあったというくらいの才人だったのだ。

ぼくが去年から今年の春にかけて、北欧精神医療施設の研究と、名目だけはまったく大げさだが、実際には単なるオートバイ旅行としかいえない放浪をやらかしたその動機も、じつはこの兄貴の猿真似にすぎない。そもそも、オートバイの面白さを教えてくれたのも、彼なのだ。

そのかつてのぼくの輝けるヒーローは、いま出っぱった下腹にワニ皮のベルトをしめて、カウンターに肘をつき、扇子片手に水割りウイスキーをちびちびなめている。それは、滑稽で、しかもどこかに或る悲痛さを感じさせる光景でもあった。

「おそいぞ」

兄貴はぼくを見ると、舌打ちして言った。

「お前の悪いくせだ。待ってる間におれが高い水割りを何杯飲まなきゃならなかったか、わかるか」

ぼくは兄貴のとなりの椅子に尻をのせながら、あてずっぽうに答えた。

「四杯だろ」

兄貴の前でグラスをふいていたバーテンダーが、白い、きれいに揃った歯を見せて笑った。気持が悪いほど白い歯だった。どうせ義歯にちがいない。最近は見た目だけのために、本物の歯をけずってしまう連中がすくなくないのだ。

「いやなやつだ」

と、兄貴はからになったグラスを手の中で回しながら言った。

「役に立たんことに関しては、こいつ、妙に勘のいいところがありやがる」

そう言われればそうだ。この兄貴とはくらべものにならない平凡な知能指数しかもちあわせていないぼくが、一年浪人しただけでK市立医大に受かったというのもそうだし、

去年の国家試験のときも、奇妙に幸運がついてまわった。ここにくる途中だって、東京タワーの下で、なんとなくスピードを落したら、すぐ先で一斉取締りをやっていたのだ。

今夜、麻布の友達のアパートに出かけるとき、べつにその必要はないのだが、院長の奥さんに行先の電話番号だけ教えておいたのもそうだ。たぶん兄貴は奥さんに電話をして、ぼくの居どころを知ったのだろう。

「なにを飲む？」

兄貴がきいた。

「コーヒーあるかな」

「このバーには、あいにく置いてございません」

バーテンダーが言った。兄貴がけげんそうにぼくを見て、

「どうしたんだ。まさか——」

「うん」

ぼくは仕方なしにうなずいた。

「お前、まだオートバイにのってるのか」

兄貴はうんざりした顔つきで、扇子をパチンと鳴らした。

「うちの若い連中でさえも言ってるんだぞ、成人式すぎて二輪に熱をあげてるなんて馬鹿だって。お前さん、一体いくつだ？　二十六か。しかもれっきとした一人前の医者のくせに」

「一人前じゃない」

「一人前じゃない？　ほう。しかし、お前、聞くところによると、結婚したがってるそうじゃないか。一人前じゃない人間が、どうして結婚なんてことを考える？」

兄貴はずばりと話の核心にふみ込んできた。ぼくはちょっと体勢をたてなおすために、煙草をとりだし、バーテンダーに、ジン・リッキーのうんと弱いやつを、と注文した。チャンドラーの小説にでてくる主人公とは逆に、ちょっぴりジンの匂いだけを残したライムジュースみたいなやつをだ。

「その先で検問やってるんでね」

ぼくは言いわけがましくバーテンダーに説明して、煙草に火をつけた。

ぼくが煙草を一本すい終るあいだに、兄貴は、また、水割りを一杯おかわりした。こっちが彼の質問に、あいまいな返事しかしなかったからだ。

兄貴はそんなぼくの気配を察して、戦術をきりかえてきた。そこら辺が兄貴の目先のきくところだろう。突っこむのもはやいが、かわり身のはやさも、おどろくべきものがある。だが、ぼくから見ると、そこが彼の唯一無二の弱点のような気がしないでもない。

だが、ともかく兄貴は、ぼくの余り喋りたくない問題から一時はなれて、別な話をしかけてきた。それもごく、さりげなく、だ。

「いま、なにに乗ってる？」

「BSA」
「へえ。ビクターか」
「いや、ゴールドスターの古いやつ」
「好きだな。やっぱり単コロが面白いかい」
「うん。ドッドッドッって持って行く感じがね」
「ゴールドスターはB三四ってのがいいんだぞ」
なんとなく、かみあっちまった。本当は今夜は話がかみあわないままに別れてしまいたかったのだが、この手の話になると仕方がない。
兄貴とはぼくが小学生のころから、しょっちゅうモーターサイクルの話をしたものだった。ぼくらが住んでいた千歳空港の近くの町には、本当の好きものは何人もはいなかったので、やはり兄貴と話をするのが最高だったのだ。千歳から支笏湖への林の中の直線コースを、兄貴の腰にしがみついて飛ばしていると、いつもうっとりして、なぜだかかならずエレクトした。
支笏湖から苫小牧へぬける道も悪くはなかったが、ぼくはアップ・ダウンの多い千歳からのコースが好きだった。朝、登校前に、残雪ののこった林の中を走りながら、ぼくは将来きっと凄いレーサーになるぞと心に誓ったものである。
ぼくらの家の商売は、自転車屋に毛がはえた位の、町のモーター屋だった。ぼくが中学にはいるころから、少しずつ景気がよくなり、バイクや軽四輪のほかに、農業用のコンバインや石油なども扱うようになってきたのだ。
親父の心づもりでは、秀才の兄貴は医者になり、丈夫なだけがとりえのぼくが家の商売をつぐ、ということになっていたらしい。ところが親父が脳卒中でたおれてから十年、いまでは兄貴が有限会社タツノ・モータースの社長で、ぼくが医者になってしまっている。
もっとも、こっちは勤めて半年たらずの駆けだしドクターだが、兄貴はそうではない。北海道の業界の組合やなにかでは、若手のまとめ役として活躍している有能な青年実業家なんだそうだ。
「ときに、どうかね」
兄貴が扇子をポケットにさしこんで言った。
「いっちょう走ってみるか」
「いまかい？」
ぼくはびっくりしてきき返した。
「ああ。おれも時には、はめをはずしてみたくなることもあるさ」
「よし」
ぼくは急にうれしくなって、煙草を消した。内心、嘘つけ、と小声でつぶやいてはいたが……。
ぼくらはホテルの人気のないロビーをぬけて外に出た。すでに午前一時にちかく、客待ちのタクシーが一台とま

っているだけで、あたりは奇妙なほどしんとしていた。
「東京のどまんなかでも、こんなに静かなときがあるんだな」
兄貴がたちどまって、つぶやいた。
「日曜の晩だからだろ」
ぼくが言った。
「ご自慢のやつはどこにおいてある？」
「駐車場だ。もってくるよ」
「いや、おれも行こう」
ぼくらは並木の下を並んであるいていった。ふり返ると、建物の背後に、東京タワーの黒い影がのしかかるようにそびえている。
駐車場のガードマンが、Gパン姿のぼくをさりげなく観察していた。ちゃんとした身なりの兄貴と一緒でなかったなら、なにかきかれるところだろう。
「これか」
「うん」
兄貴はぼくのBSAの前にくると、ちょっと目をほそめて、すぐには手を触れず、一回ぐるっとまわりを歩いてから、タンクの腹を手でぴたぴたと軽くたたいた。
「お前が塗ったのかね、この色は」
「ああ」
「キーを貸してみろ」
「あんたは飲んでるからだめだ」
「始動させるだけさ」
「くせがあるから無理だ。今夜はおれにまかせなよ」
「そうか」
兄貴は意外なほどおとなしく引きさがった。そこのところが、どうも気になった。大体こんなとき、あっさりぼくの言うことをきくような兄貴じゃない。たぶん、走りながらさっきの話をむし返そうとでも企んでいるんだろう。
ぼくはまだ暖か味ののこっている単気筒のエンジンを、キック一発で始動させた。
「いい調子じゃないか」
兄貴がぼくの背後から言った。彼は軽くぼくの腰に両手をまわして、指先で合図をした。ぼくはゆっくりと走りだした。いかにも馬力のある働きものといった感じで、エンジンの突きあげるような上下動がトコトコ尻につたわってくる。
駐車場を出て、信号をまがると、ぼくは首都高速環状線の芝公園ランプのほうへむかって走って行った。料金所を横目で見て通りすぎ、途中で芝浦方面へ左折した。
「どこへ行く？」
「好きなコースがあるんだ」
「よし」
少し走って海岸通りへ出た。日曜の夜なので、いつもは

無茶な飛ばしかたをするタクシーの数も少なかった。

この辺は制限時速五十キロだ。兄貴の手がしきりとサインを送ってくるが、ぼくはスピードをおさえてゆっくり走った。馬に乗ってでもいるような、こんな走りかたがぼくは好きなのだ。うしろでチカチカと、強いパッシング・ライトが点滅した。

一台の乗用車が、あらっぽい追いこしをかけてきた。ぼくらの横をすれすれにかすめ去ると、尻をふって前に割りこみ、ブレーキ灯を派手に点滅させる。

車高をさげた、横浜ナンバーのカローラだ。ぼくの背中で、兄貴がかっと熱くなるのがわかった。

「いけよ」

と、兄貴が言った。

「あんなガキの車になめられるな」

ぼくは笑いをかみころして、逆に少しスピードをおとした。

「どうした」

兄貴が苛立ってぼくの背中をこづいた。ぼくは首をふって言った。

「最近はそういうことはやらないんだ」

「ほう。大人になったというわけか」

「なんとなくね」

赤い尾灯が遠くに見えなくなると、ぼくはまた少しスピードをあげ、深夜の道路を走りつづけた。やがてぼくらは左へ折れ、巨大な埋立地に乗りこんでいった。

「不思議な場所だな」

と、兄貴が呟いた。あたりはまったく人気がなく、車一台見あたらない広々とした道路と、鉄橋と、螢光灯の列が、未来都市のような光景をつくりだしている。暗い海のほうに赤いクレーンが見え、そのむこうに羽田空港の灯火があった。

ぼくは今度はすこしスロットルを開いた。BSAは身震いするようなトルクで加速した。

ぼくは最初はひかえ目に、やがてかなり大胆にコーナーを回っていった。ぼくの体とBSAがひとつになり、兄貴は背後でぼくらの動きに微妙なカウンターをあててくる。

やがてぼくらは、むかしの感じをとりもどした。ぼくらは自由になり、さらに大胆な走りかたをした。三十分もたつと、呼吸までがいっしょになったようだった。

やがてぼくらはBSAを夜の海にむけて静止させ、並んで煙草をすった。

「彼女のことを、誰から聞いたんだい」

ぼくはたずねた。兄貴はちょっとのあいだ黙りこみ、それから、院長さんのお嬢さんから手紙をもらったのだ、と、答えた。

「あいつか」

ぼくは舌うちした。
「よけいなおせっかいばかりやきやがって」
「いい娘さんだ。お前のことを、たぶん本気で心配してくれてるんだろう」
「どんなふうに書いてよこしたんだい」
「お前が病院の患者と恋愛して、結婚する気でいるらしい、とね」
「彼女になんの関係があるんだ、そんなこと」
「本気なのか、ツトム」
兄貴はぼくの顔をじっとみつめた。
「精神病の女の患者と結婚するなんて、お前、いったい何を考えてるんだ。え?」
ぼくは黙っていた。
あたりは静かで、空も、海も、くらかった。
「うつ病の患者さんだそうだな」
兄貴が言った。ぼくは首をふった。
「じゃあ、分裂症なのか」
「そうは思わない、おれは」
「院長のお嬢さんの手紙には、うつ病で三年も入院しているひとだと書いてあったが」
「カルテじゃそうなってる。でも、かならずしもそうとは言いきれないだろ」
兄貴はため息をついて煙草を爪ではじいた。暗いなかを赤い火が弧をえがいて飛んだ。
「うつ病とか分裂症とか、そう簡単に割りきれないところがあって難しいんだよ。おれたちが使ってた教科書ではきちんと分類できてるけど、実際に治療にかかわりあってみると、なかなかそう明快にきめられない所があるんでね」
「非定型精神病とかいうのもあるそうじゃないか」
ぼくは暗い中で兄貴の顔をすかして見た。急に腹が立ってきた。大体がこういう奴なんだ、兄貴って男は。
頭がよくって、抜かりがない。それも並みの秀才とかなんとかいうのではなく、異常なくらいに冴えている。世の中のことや、人間なんてものの中身がすけて見えるものだから、こういうことになってしまうのだ。北海道の家の近所の人なんかは、そんな兄貴のことを、〈十で神童、はたちで才子、三十すぎればただの人〉などとからかったりするが、それはちがう。これも一種の不幸ってものじゃなかろうか。
「勉強してきたのかい」
と、ぼくは言った。
「一応な」
兄貴はうなずいた。
「札幌で大学の医局にいる昔の友達にレクチュアしてもらったのさ。それに飛行機の中で、二、三冊、あたらしい精神医療の本も読んできた。ちょっと心配だったんでね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com